文教大学の授業
2008. 12. 5 No. 27
文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
TEL 048-974-8811 〒343-8511

教職の道への案内人として

情報学部　松 本　浩 之

1982 年に公立小学校の教員になり、25 年間ひたすら小学校の教育現場で仕事をしてきた。その間体育、算数、国語、社会、理科、生活、特別活動、生徒指導、総合的な学習の時間、校内研究、学校園管理、そして教務全般、学校運営と小学校の中にあるありとあらゆる仕事の責任者として力を尽くした。2007 年より情報学部の教職課程の教員として、湘南校舎で教職課程を履修する学生を中心に指導にあたっている。（まつもと・ひろゆき）

湘南校舎の教職課程は、5 年ほど前に高校の「情報」の免許取得の課程ができ、後に中・高の「社会」、「数学」、高校の「商業」そして中・高の「英語」と課程を増やしてきた。私は、教職課程担当の教員の使命は教員養成、つまり「よい教員」になる人材を教育現場に送り出すことだと心得ている。この使命感に基づいて、私の授業そして湘南校舎教職課程の教員養成に関わる事業にどのように取り組んでいるかご紹介する。

１．「授業はいきもの」

「教育実地研究」という科目で学習指導案づくりを行っている。授業の構想を練るための手順として１．目標の設定　２．生徒の実態の把握　３．指導観の確立　４．授業の流れの構想と進むように指導するが、ここでいつもネックになるのが「生徒の実態の把握」である。自分は、現場での経験から、実態がほとんどつかめない状態で指導観が定まるはずはないと確信している。大学の授業の中で立てる指導案であるから、「生徒の実態」は、想定するしかない。ここが学生にとってはきついところで、想定するといってもその元になるような経験に乏しい。さらに言うならば、なぜ「生徒の実態の把握」がそれ程重要なのかがわからない。

大学の講義の体験を、ということで高等学校にお邪魔して「教育学」分野の「模擬講義」を高校生相手に時々やる。ある高校でこんな体験をした。同じ内容の講義を 2 回連続でやってほしいということで各回の受講者は 10 名足らずであった。1 回目、淡々と講義は進み予定通りの内容を終えた。ところが 2 回目、講義は余談の部分がふくらみ、予定していた内容の半分ほどで時間切れだった。この原因は何だったのかを振り返ると明らかに生徒の反応の違いにあったと思われた。1 回目の生徒は静かだが反応がなく、ただ時間が過ぎるのを待つ様子、2 回目の生徒は反応が豊かで身を乗り出すようにして話を聞いてくれたからである。講義後の感想もその反応を反映した内容だった。指導する側が同一の内容を用

意してきても生徒によって授業は変わる。まさに「授業はいきもの」であることを改めて実感させられた体験だった。

学生には、こんなエピソードも聞かせるのだが、やはり自分で実際に体験しないと分からないことが多いと思う。(そのために後から述べるような教育現場に学生のうちから積極的に出ることを奨励している。)話を大学での自分の講義に戻すが、「授業はいきもの」という前提に立ち、学生自身の体験を拾い上げながら授業に盛り込むことを心がけている。幸い学生は、数年前には中・高生だったわけで学校での出来事はまだそれほど古びた記憶ではない。特にこの秋セメで開講している「学級経営論」や「特別活動の研究」では、学生自身の経験した学級や学校行事等の記憶を再生させたり、アンケートをとったりして学生の知識や体験の実態を把握した上で本来あるべき姿、理想の形を考えるようにしている。また、マスコミが教育問題を記事にしない日はないというくらい教育論議が頻繁に交わされているこのごろ、これを講義に取り入れないのはもったいない。時には講義の内容に関連する時事的な教育問題で討論の場を仕組んだりしながら進めている。

ゼミ風景

２．体験型授業を意識して

教職教養科目の授業は、教育現場に出た時に役に立つべき教養でなければならない。そこで語られるのは、実践に即した理論でなければならない。また、どこの学生もそうだろうが、話が一方的で理屈っぽくなると睡魔に襲われる者が多い。湘南校舎の教職教養科目は五時間目に集中していることもこの傾向に拍車をかけている。この実態を踏まえて出来上がった指導方針が理論編と実践編を 90 分の中で同時並行で進めていくものである。

理論編は講義ノートを印刷配布し、空欄の穴埋めをしながら効率的に進める。実践編は学校現場の実務を模擬的に体験する方法で進める。

実践編の例を挙げよう。先程挙げた「学級経営論」の場合、講義の履修者を１つの学級とみなし「学級会」を開いて座席決めをする。議長役、書記役、話し合いのメンバーを設定し話し合いのルールも確認する。この体験を通して学生は、民主的な話し合いが効率の悪いものであること、一見民主的と見られる手続きが多数派の横暴になりかねないこと、議長のリーダーシップとそれを指導する担任教師の力量が非常に重要であることを学ぶのである。理論編では、「民主的な運営が望ましい」と一言でいわれてしまう学級会が実際にはいかに困難なことであるか身をもって学生は感じることができる。また、いわゆる「朝の会」「帰りの会」を計画立案してプログラムを決め毎時間実施する。学級経営の中でこの始めと終わりのわずかな時間の運営が大切な機能を果たすことを体験的に学ぶ。また学級で起きる諸問題を想定し、担任としてどう対処するかを討論する。たとえば「あなたが担任するクラスで『靴かくし』が発生しました。あなたは、担任として隠された子、隠したであろう子、クラス全体にどんな働きかけをしますか？」といった問題を投げかけ実際に数人に模擬的な指導を試みさせる。その上でその指導法の是非について討論させる。実際の現場に出ればすぐに遭遇する出来事だけに自分だったらこうする、という心積もりをしておくことは役に立つはずである。また、その時その時の担任の処置なり、対応が学級経営の基本方針と密接に関わることにも自然と気付いていけるようにする。

「特別活動の研究」では、具体的な行事等の活動案の作成と活動の実際の運営を実践編として盛り込んでいる。幸いここの教職課程

には毎年恒例の「夏合宿」と「春合宿」（詳しくは後述）があり、これこそ「特別活動」の典型のような内容である。これを素材にしない手はないと考えて始めた。これはもう「模擬」ではなく授業を通して実際の計画を立案し、実施するのである。特別活動の活動案は、学習指導案とは内容も形式も異なる。これといった決まりがあるわけでもない。しかし活動や行事がスムーズに流れ、意味のある活動になるかどうかは、活動案の出来にかかる部分が大きい。授業ではまず教員が具体的な項目などの枠組みを示し、細部については実際に自分たちで書いて持ち寄って練り上げるという方法をとっている。事前準備の役割分担や、精緻な準備日程の作成が重要であることも知らせながら実際に使える活動案に仕上げていく。この授業は２年生のほとんどが受講しているのでこれから行われる合宿の中心を担う２年生のほとんどが合宿の計画立案に関わることになることは大変意味があると考える。

３．教員養成事業

湘南校舎の教職課程履修学生の中で、初めから「絶対教員になる」と思って入った者は、限られている。「大学で取れる免許といったら教員免許くらいだから」「親が教員免許くらいとっておけと言うから」などの理由で教職課程を履修する学生もいる。そんな中での教員養成、つまり「よい教員」になる人材を教育現場に送り出すためにはそれなりの努力と工夫が要る。その一つが早期の現場体験である。入学して間もなく、教職科目を登録した学生は、小学校へのサポート活動に出るため、合計 10 コマの事前研修に参加する。これは神奈川県とＮＰＯ法人が協働で行っている派遣事業で、事前研修を終えた者が大学講義の合間や休業期間を利用して近隣の小学校に児童のサポートに出向いている。この派遣事業の特徴は、1 年間定期的に（週に 1 回が基本）一つの学校に通い続けるところにある。学校インターンシップで単位をとる制度もあるが、これは短期間である。1 年間通い続けることにより、学校はどんなところなのか、児童や教員の素顔はどんななのかがよく見えてくる。いわば教育実習を１年生からやっているともいえるが、派遣学生に及ぼす効果は教育実習以上のものがあると感じている。

特別研修のひとこま

私は、派遣学生に「どう？学校は」とよく尋ねるが大抵「大変です」と返ってくる。それで私はさらに「でも楽しい？子ども達はかわいい？」と聞く。正規教員でない学生サポーターに対して子ども達は感じたまま、場合によっては大変失礼な態度をとる。いろいろな事情から心の荒れを抱えている子どもは、会ったとたんに敵意を向けてくることさえある。そんな「被害」に遭いながらなお「子どもがかわいい」と思える学生は、やはり子どもが好きなのである。だから私は「それでも子どもが好きで、子どもの喜ぶ顔を見て自分も喜びを味わいたいと思えるなら、あなたは教員になれるかもしれない。」と応える。言われるまでもなく、学生たちは１年間のサポート活動を通して自分のやりたい仕事かどうか、自分に向いている仕事なのかどうか判断していくようである。現場体験については、この小学校への派遣事業のほかにも、藤沢市や茅ヶ崎市の募集に応じての小・中学校へのボランティア活動やフリースクールでの指導などいろいろな機会を最大限に利用するように働きかけている。１、２年生のうちにこういう経験をして、自分は教員になりたいという気持ちを固める学生を育てること、これが湘南校舎の教職課程においては重要な課題だと考

えている。

４．合宿で鍛える

教員への志を鍛える場として重要なのが、春と夏の合宿である。これは湘南校舎の教職委員長、柳生和男教授が理事長を務めるＮＰＯ法人が毎年主催しているもので、湘南校舎の教職課程の学生が参加する。春は二泊三日で研修施設に缶詰になる。２、３年生が予め指導案を作成し､全員が模擬授業を展開する。本学の教員の他に現役の指導主事や校長、教頭などの授業のエキスパートを招き、一人ひとりの授業について、授業の進め方はもちろん、話し方、聞き方、板書の文字やその書き順に至るまで徹底的に指導する。授業者の学生のほとんどは、完膚なきまでに打ちのめされ、授業作りの厳しさを思い知るのである。また、前回の春合宿では、一般の児童生徒の保護者を多数招待し、卒業間近の４年生を中心に模擬保護者会を体験した。担任役を務めた学生の中には、保護者に言い込められたくやしさからか、涙する者も見られたほど迫真に迫る模擬保護者会となった。

夏は、富士山麓に出かけ不登校児童・生徒をマンツーマンでサポートし､寝食を共にし、そして富士登山に挑戦する。励ましあいながらそして時に叱咤しながら自然の厳しさと美しさを共に感じ、偉大な富士を克服した力を我がものとする。体力の限界の中で本気を出し、その強さを自信として明日からの自分を変える原動力につなげる合宿である。夏合宿は、偉大な自然を相手として人としての懐の深さを培う合宿とも言えよう。

夏合宿のキャンプファイヤー

５．採用への道案内

「よい教員」になる人材を教育現場に送り出すために最も重要なのは、教員採用試験合格に導くことである。いくらよい卒業生を出したとしても、教員に採用されなければ自分の使命を果たしたとは言えない。

湘南校舎の教職課程の学生の多くは中学・高校の教員を志望する。取得できる免許がそうだから当然である。しかしその採用試験は団塊の世代の大量退職に伴う教員大量採用時代を迎えている現在であってもやはり狭き門と言わざるを得ない。特に今年度の３、４年生の取得できる免許は、高校の情報と中・高の社会に限られている。各都道府県の採用枠は限りなく小さいと言える。このような状況で湘南校舎学生が教職に就く道は、と考えると、やはり小学校教員採用試験が受けられるように指導するしかない。小学校で採用されれば後に希望して中学校へ異動する道は開かれる。小学校教員免許をなんとか取得できないものか。そこで見出された手立てが在学中に文部科学省の実施する小学校教員免許認定試験に合格して小学校の採用試験を受験するという方法である。中学校あるいは高等学校の教員を輩出することを目標としながらも、その手段としてまずは小学校教員として採用されることを目指すように指導するのである。

また、教職課程には、入学時点から実は小学校の教員になりたかったのだという者もいる。さらに、履修を進めながらいろいろな機会に小学校教育の面白さや子どもの可愛らしさを感じて小学校教員へと希望を変える学生もいる。そういう学生の思いに応え、共に道を切り開いていくことも自分の使命ではないかと感じるこのごろである。小学校教員免許認定試験に合格することは易しいことではない。しかし不可能なことではない。平成 20 年度の認定試験では湘南校舎から５名の学生（うち３名は３年生）が合格を勝ち取ることになり、延べ８名の合格者を出すまで実績を重ねつつある。湘南校舎にも教職へ道があることを示し続ける案内人としてさらに努力を重ねていきたい。